**第36号**

**関東支部ニュース**

　2017年3月1日発行 　 　　　　　　日本比較文化学会関東支部

2016年度第2号のレター発行となります。本号では、2016年12月3日（土）に同志社大学にて開催されました。　「第45回支部例会（兼関西・中部・関東三支部合同大会）」での支部会員の発表要旨を掲載致します。

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　日本比較文化学会関東支部事務局長　郭　潔蓉

**◆第４５回 関東支部研究例会　ご報告◆**

2016年12月3日(土)、同志社大学今出川キャンパス良心館3階、RY301・RY 302の両教室において第45回関東支部例会（兼関西・中部・関東三支部合同大会）が開催されました。当日は両支部より5名の会員による研究発表が行われましたが、各発表において積極的な意見交換がなされ、大変有意義な例会となりました。以下、例会での研究発表の要旨を掲載致します。

**◆開会のことば**

**◆研究発表：**

**１．カナダ在住日本人女性就労者のキャリア形成意識に就労における葛藤と属性が及ぼす影響**

お茶の水大学大学院 博士課程後期

和田 薫子

本研究はカナダ在住の日本人女性就労者のキャリア形成意識を明らかにし、就労における葛藤や年齢などの属性との関連を明らかにすることを目的とし、カナダ在住の日本人女性就労者93名を対象に質問紙調査を行い、統計的に分析した。研究課題１では、対象者のキャリア形成意識について因子分析をした結果、「継続勤務希望」、「日本文化普及希望」、「離職希望」、「専門性活用希望」、「転職希望」の５因子が抽出された。研究課題２では、キャリア形成意識に影響を与えている要因を明らかにするために重回帰分析を行った結果、「継続勤務希望」には「不満足な職務内容」が負の影響、年齢が正の影響を与えていた。また、「日本文化分離」には「疎外感」が正の影響、「言語能力不足による意思負疎通」、「勤務時間」、「カナダ人社員数」が負の影響を与えていたことが明らかとなった。最後に、「転職希望」には「不満足な職務内容」が正の影響を与えていた。このことから、カナダ在住日本人女性就労者のキャリア形成意識は、職務内容への満足や職場における疎外感と関連していることが示唆された。

**２．保育者になりたい気持ちと自己効力感**

新島学園短期大学 准教授

成田 小百合

保育現場では新人保育者の離職率の高さが社会問題の一つになっている。本研究では保育の資格取得への要請が高まっている中、保育学生の個人内要因の一つである自己効力感に着目した。自己効力感は、社会学習理論の中核をなす概念である。保育者になりたい気持ちと特性的自己効力感尺度・保育者効力感尺度・職業認知尺度との関連について、保育者養成課程の短期大学生116名を対象に学年比較するために、質問紙調査を実施した。その結果、1年生と2年生では特性的自己効力感に差はなかったが、保育者効力感は2年生の方が低くなっていること、保育者になり実際に働きたい気持ちより保育者の資格のみを取得したい気持ちが高い学生の方が保育者効力感や保育に関する職業認知は低い傾向であることが明らかとされた。保育者養成過の教育において、学生への保育者効力感を高めていくための課題と、保育者としてのアイデンティティ形成よりもともすれば資格取得だけが優先されやすいキャリア支援の見直しについて考察した。

**３．柳宗悦と美術館**

筑波大学大学院 博士課程後期

篠原 華子

柳宗悦（1889—1961）は、1926年に始まった民藝運動の創始者として知られている。民藝とは民衆的工芸の略称であり、西洋美術の規範からはほとんど評価の対象とはならなかった日常生活品を美のひとつとして捉え、それらが持つ美を「健康の美」や「尋常の美」と称した点に特徴がある。また、この運動は「日本民藝美術館設立趣意書」（1926）に始まっていることから、美術館という近代装置を重視した運動であると言えるだろう。設立趣意書の発表から10年の年月を経て、日本民藝館は1936年に東京・駒場に開設されたが、この時には「美術館」ではなく「民藝館」と改名されている。柳は「民藝館について」（1941）のなかで、民藝館は「美的価値を中心とした美術館」であると述べており、民藝の趣旨を明確にするために「美術館とは呼ばずして、『民藝館』と名附けた」と説明している。そこで、柳宗悦が同人として参加していた白樺派での美術館の位置づけや民芸運動と同時代の美術展示を参照しながら、民藝における美術と工芸の差異化と美術館あるいは民藝館という近代装置が果たす働きの関係性について検証する。

**４．小夢『水魔』の謎に迫る―日本文化とヨーロッパ世紀末芸術のはざまで―**

都留文科大学文学部 准教授 加藤 めぐみ

大正・昭和初期に活躍した挿絵画家、橘小夢（1892-1970）の代表作『水魔』は、政治的な圧力が強まりはじめた1932年（昭和7年）の発表当時、「発禁」処分となり、以来、橘小夢は「幻の画家」として、久しく歴史の表舞台から姿を消していた。日本に古くから伝わる「河童」をめぐる民間伝承に根差しながら、ヨーロッパの世紀末芸術の影響も色濃いこの版画（リトグラフ）作品は、河童にとり憑かれた女性の両性具有性、河童と女性との関係性、フォルムの歪みなど多くの謎を内包し、限りない解釈可能性を喚起する。さらにはこの作品が日本で発禁処分になった時期にオーストリアの学会誌に紹介されたとの記述が秋田魁新報に残されている。本発表では橘小夢の『水魔』が日本文化とヨーロッパ世紀末芸術の交接点にあったことを示すことで、その背後にあった歴史的コンテクストを紐解いていきたい。

**５．小、中、高、大連携についての一考察：英語教育の観点から**

東海大学湘南学舎外国語教育センター 准教授　髙橋 強

今回の発表は、英語教育の立場から、小、中、高、大連携について考察を深めていくこととする。本学は、日本でも有数の大規模校であり学べない学問はないのではないかというほど学部学科の多い大学である。また付属諸学校も小学校から高校まであり、大学も日本各地にキャンパスがありそれぞれその地域に根差した教育を実践している学校である。これまでの本学の印象としては、非常にスポーツが盛んな教育機関であるという印象を持たれる方が非常に多くおられるのではないかと思う。そこで、本年度から、高大連携委員を務めさせて頂き、英語教育の観点から小学校から大学までの英語教育の連携について述べてみたいと思う。

まず、高大連携会議が夏休みに行われ、今後ますます加速する国際化に合わせ、英語教育のさらなる充実を図るために、英語教育を改革しようという機運が高まった。それに合わせ、英語力アップのための３つの宣言が採択された。それによると、初等中等教育機関で目標値を設定して英語教育に取り組むこと。小学校から大学までの一貫教育体制を充実させること。アクティブラーニングを基本とし、プレゼンテーション、ディベート、ディスカッションなどの能力を高めることとするという方針が打ち出された。また外部試験を積極的に導入し、常に英語力を測定することとする。さらに、1999年の中教審の答申をうけ、「中等教育と高等教育の接続の改善」が打ち出され、以来ますます連携の強化が叫ばれるようになった。英語教育においても、高校の英語教育活動を補完し、より発展的、専門的な学習を実践し、学生のモティベーションを高めることと、教員間の情報の共有が大切になってきており、受け入れ態勢の充実という点からも連携の意義は大きいと思う。そして、積極的にベネッセという民間の教育機関と提携し、外国人教員を派遣してもらい学生のコミュニケーション力を身に着けさせること。さらに、高校、大学など付属諸学校での英語教育についての取り組みと実践例並びに成功例について、外部試験導入の是非について、民間の教育機関から外国人教員を派遣することで果たして教育効果が向上するのかという問題点。それと英語教育を今まで以上に重視することへの付属高校の反応と不安についても今回の発表で紹介したい。さらに、関西地区にある他大学で民間と提携して学習効果が期待できるのかどうか、また教員の質を保持できるのかどうかなど様々な問題点がある中での実践例や成功例などを踏まえて、本学における、英語教育の素晴らしい点や改善すべき点などについて発表することとする。また今後の展望や改善点などについても触れながら研究発表したい。

◆**講　演**

**「年末年始、京の歳時記」**　　　　　　　　　　　　　　　　中川久公（京都恵美須神社宮司・同志社大学嘱託講師）

◆**閉会のことば**

※大会閉会後、懇親会を行いました。

以上